

環状記念物の歴史的意義
－東京湾沿岸と南東アメリカの比較から－

高 梨 俊 夫

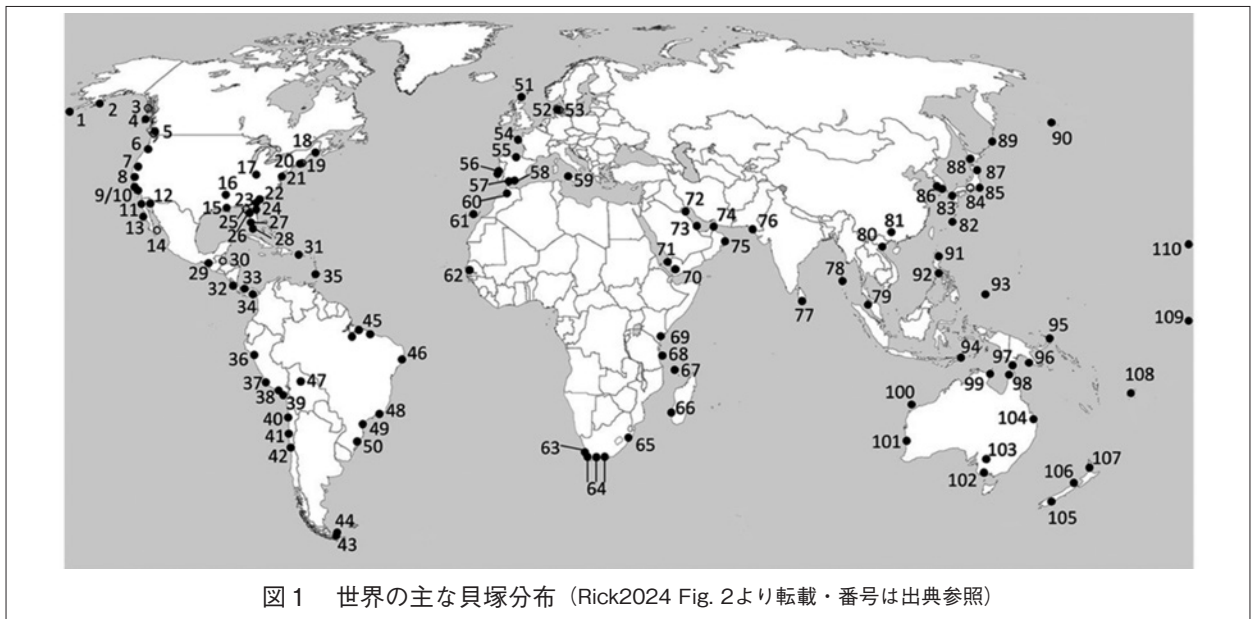
目 次

はじめに	263
1 北アメリカ南東部の環状遺構を有する遺跡の研究史	265
(1) Shell Ring Siteについて	265
(2) Mound Complex Siteについて	269
2 東京湾沿岸域の環状遺構との比較	270
(1) 環状貝塚とShell Ring	270
(2) 環状盛土とMound Complex	270
(3) 環状遺構の世界的分布の意味するもの	275
3 まとめ	275
(1) 類似性が物語るもの	275
(2) 環状記念物形成期とその後の社会	279
(3) おわりに	279
あとがき	280

はじめに

千葉県は、日本列島内で縄文時代の貝塚を最も多く有する県である。直近の分布調査によると733か所が確認されている（千葉県教育委員会2021¹）。中でも、貝殻のない中心部分を取り囲むように円形から楕円形に貝殻が盛られた「環状・馬蹄形貝塚」は、千葉県の縄文時代を特徴付ける遺跡であるばかりではなく、「加曽利貝塚」が国指定特別史跡となっているように日本を代表する遺跡である。

貝塚に関する研究は、1800年代半ばからデンマーク他のヨーロッパ地域及び北アメリカで進展し、1877年のモースによる日本の大森貝塚の調査を始め、世界中での調査により層位的発掘や相対的年代学構築の基礎を築いた。貝塚は、南極大陸を除くすべての大陸で確認されている（図1）。



現在の貝塚考古学の研究動向については、Torben C. Rickは、過去10～15年間の主要な研究課題には、遺跡の分布と時代性、水中考古学、歴史生態学、テラフォーミング（住環境改変）、景観遺産、コミュニティコラボレーションに関する研究が含まれており、これらの研究は、貝塚考古学研究者が五つの主要課題として特に位置付けていた、(1) 人類の歴史と文化の進化における沿岸資源の重要性、(2) 過去の人々が陸上および水生生物と生態系に与えた影響、(3) 人々が日常の活動、ムラの建設、儀式、儀礼を通じて陸地と海の景観をどのように変えたか、(4) 考古学的な遺跡の形成プロセス、(5) 先住民の子孫コミュニティとの協力関係、についてより包括的に、より学際的に進めてきたとしている（Rick 2024²）。

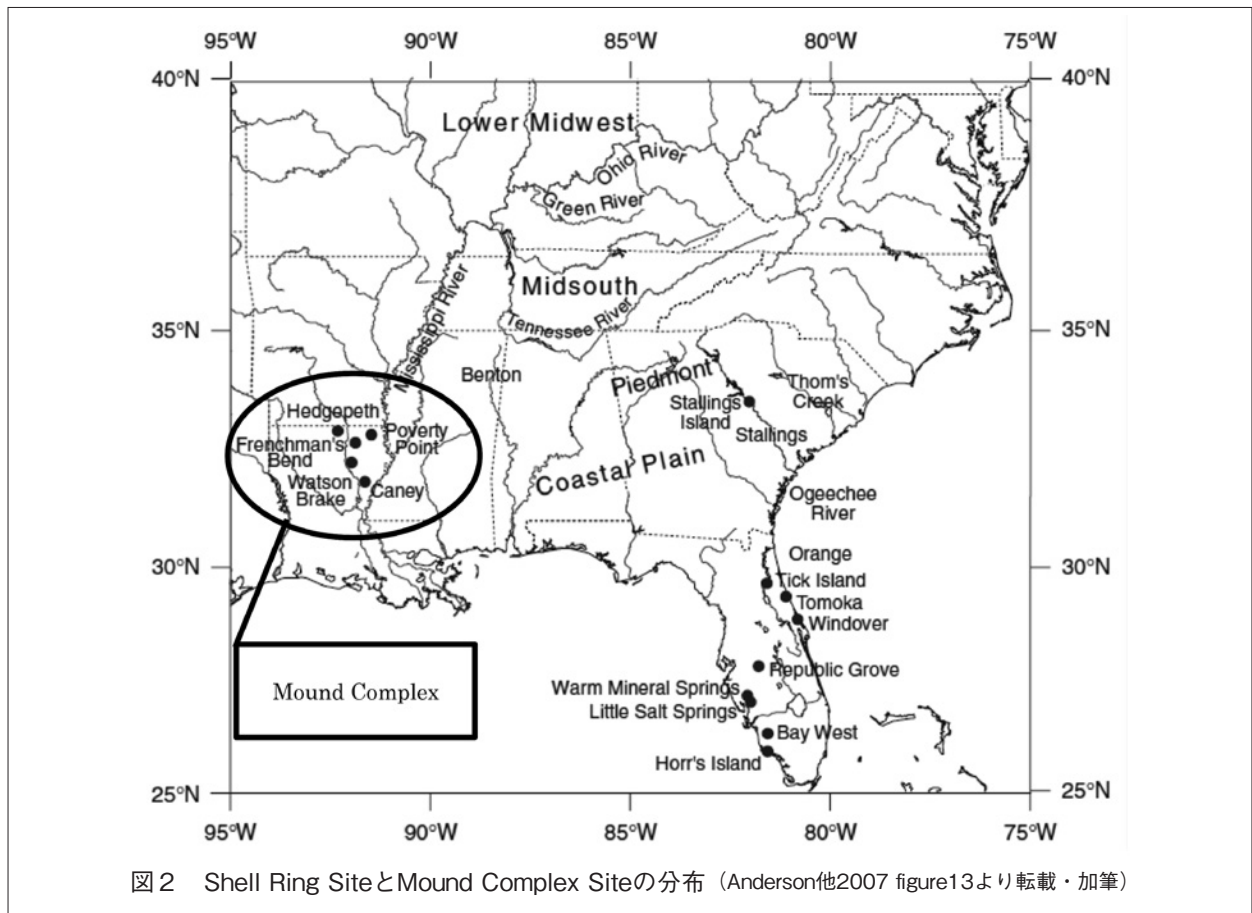
日本においても貝塚の調査研究は、縄文土器編年の基礎を築いた他、人骨や残留動物骨、貝等の分析により、縄文人の食生活や生業、環境の復元に大きく貢献してきた。しかし「環状・馬蹄形貝塚」の性格については、「ゴミ捨て場」「干貝加工場」「環状累積集落」「祭祀場」説などが議論されてきたが、定説に至っていない。一方、「環状・馬蹄形貝塚」と極めて類似性の高い形状を示す「環状盛土」も井野長割遺跡、三直貝塚、三輪野山貝塚、上宮田台遺跡などの千葉県内の調査例が増えるとともに特別史跡加曽利貝塚の南貝塚・北貝塚の発掘調査によって環状・馬蹄形貝塚も中央窪地の削平と盛土を伴って形成されていることが明らかになり、両者は貝層の有無はあるものの同様の作業によって構築された可能性が高まった。

こうした東京湾沿岸地域を中心に分布する環状貝塚や環状盛土の性格については、中部北陸地域に分布

する環状木柱列、関東から東北・北海道地域に分布する環状列石、北海道に分布する環濠、環状盛土等と同様の思想に基づく縄文時代の環状記念物であると考察し、儀礼・祭祀による権力者の萌芽と社会の複雑化をもたらしたものであるとの見解をこれまで述べてきた。また、環状貝塚の本質を議論するために環状集落との重層構造や祖霊祭祀・円環状死生観に基づく宗教性、二至二分等の特定日を可視化する装置としての儀式場説についても論じてきたところである（高梨2018³・2019⁴）。

「環状・馬蹄形貝塚」や「環状盛土」は、環状集落と貝層・盛土の双方の理解により解明し得るものである。環状集落の円環分域と放射分節の規制の有無、貝堆積の偶発性と計画性、中央窪地と盛土の形成過程を時間的経過とともに総合的に復元し、出土遺物の性格と合わせて判断することができれば、「環状・馬蹄形貝塚」や「環状盛土」の本質に迫ることができるが、そこまでの研究に至っていないのが現状である。

そこで、これらを検討するにあたり、主にイギリスのストーンヘンジをはじめとする新石器時代のヘンジとの類似性について考察してきたところであるが、より環状貝塚や環状盛土との類似点が観察される遺構が北アメリカ南東部に存在することを知り得た（Russo他2001⁵・Saunders他1997⁶）（図2）。



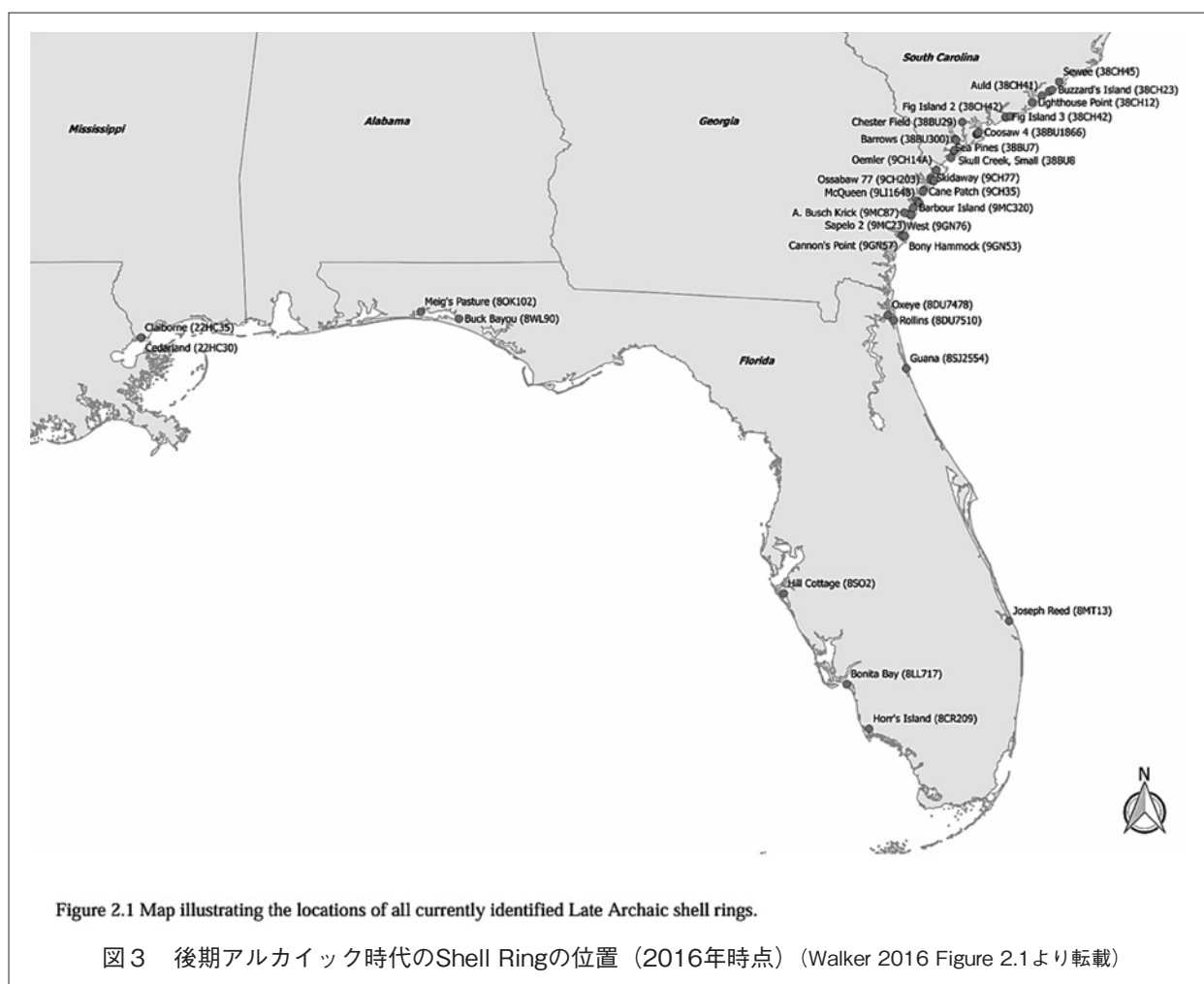
そもそも環状貝塚や環状盛土に象徴される東京湾沿岸地域の「貝塚文化」の性格を考えるにあたり、環状貝塚や環状盛土が意図的な人工構築物であるとすれば、これらが縄文時代の日本列島特有のものなのだろうかとの疑問があった。ある環境下での人類活動によって発現するものであるならば、ホモ・サピエンスのアフリカ単一起源説に基づく移動拡散理論により約3万7千年前に日本列島に到達し、滞留したその後の「縄文人」と北米大陸に移動していったその後の「アルカイック人」との文化比較をすることで、現生

人類の習性として解明することができるのではないかと、また、日本列島に到達する前の地域での情報があればより理解を深めることができるのではないかと考えた。本論では、情報を入手することのできた縄文時代に並行する北アメリカ南東部のアルカイック時代の遺跡を中心に比較検討しながら環状貝塚や環状盛土の性格を整理し、それらの遺跡が歴史上どのような役割を果たしたのか考察するものである。

1 北アメリカ南東部の環状遺構を有する遺跡の研究史

(1) Shell Ring Siteについて

フロリダ半島周辺の沿岸域（サウスカロライナ州・フロリダ州・ジョージア州・ミシシッピ州）に分布するShell Ringは、日本の環状貝塚によく似ている遺構である。時代は、アルカイック時代後期である紀元前3000年から紀元前1000年頃であり、日本の縄文時代中期から晩期にかけて展開した大型環状貝塚と同時期のものである（図3）。



北アメリカ南東部におけるShell Ringについては、Martin Peter Walkerによって研究史が以下のようにまとめられているので紹介する（Walker2016⁷）。（以下、抜粋を翻訳して引用）

「1802年にJohn Draytonによってアルカイック時代後期のShell Ringがサウスカロライナ州の沿岸に存在することが認識され(Drayton1802⁸)、その機能の諸説が研究されてきた。主なものは、防御構造物(Moore 1897⁹)、環状集落の住居の残骸(Crusoe and Depratter1976¹⁰他)、儀式活動の中心(Cable1997¹¹他)、記

念碑的建造物 (Russo2004¹²) などである。

Anderson他は、北アメリカにおけるShell Ringの定義を「貝のない内部広場をもつアーチ型に貝を盛り上げた構築物」とし、構築された時代背景については、「更新世の終わりに北アメリカ南東部に定住した人々は、アルカイック時代後期までに環境がより安定化したことで、この地域の人口密度の上昇と社会の複雑化を増大させた」とした (Anderson他2007¹³・Anderson and Sassaman2012¹⁴・Gibson and Carr2004¹⁵・Russo1994¹⁶・2004¹⁷)。また、人口の増加は、アルカイック時代中期と比較し、アルカイック時代後期の遺跡数の大幅な増加と物質文化の多様性の拡大の両方によって示される (Anderson 1996¹⁸・Sassaman2010¹⁹・Steponaitis1986²⁰) としている。

Martinは、アメリカのShell Ring研究は、1990年代後半以前は、ニューアーケオロジーの台頭によって推進されていたため、生存戦略、地域環境、行動生態学に、より焦点を当てていたが、1990年代後半には社会的・政治的要因、機関組織、構造などのアプローチを取り入れるようになり、Shell Ringが権力、階層、社会の複雑化をどのように示しているかという観点から議論されるようになったと指摘している (Martin2016²¹)。

Russo他は、大規模なマウンドの建設が完新世中期までさかのぼる狩猟採集民の生活の一部であったことは、アルカイック時代の北アメリカ南東部の社会の複雑化に対する我々の理解に大きな変化をもたらした (Anderson and Sassaman2012²²；Russo1994²³・Sassman2010²⁴) とし、C字型、円形の差は、Shell Ringを構築する社会における組織構造と力関係の違いを反映していると推測し (Russo2004²⁵・Russo and Heide2001²⁶・2003²⁷)、Shell Ringの形態の差は、構築中に存在した可能性のある非対称的な社会関係の証拠が含まれている (Sassaman1993²⁸・Russo2004²⁹・Russo2002³⁰・Russo and Heide2003³¹) としている。

また、利用可能な豊富な資源により、Shell Ringを構築した人々は他の人々よりも高い定住性があった可能性があり、それが社会的相互作用の複雑さを増進した可能性がある。これは、饗宴、土器生産などのより専門的な工芸品の発達、Shell Ringのような環状構築物の意図的な建設と維持などの行動にみられる (Russo and Heide2001³²・Russo 2004³³・Russo and Heide2003³⁴・Saunders2004³⁵) としている。

Thompson他は、Shell Ringの形成と機能に関して、漸進的蓄積理論と儀式理論を提唱している。それによると「漸進的蓄積理論とは、Shell Ringを永久的又は半永久的な環状集落と見なし、シェルマウンドの繰り返しの使用と企画意図により貝が最終的に蓄積し、Shell Ringという認識可能な構築物を形成する」ものであり、「儀式理論とは、Shell Ringは社交的なセレモニーやコミュニティのモニュメントとして利用されることを意図して設計及び構築された短期間の意図的な築造イベントと見なす」ものである。サベロ島での研究では、Shell Ringの形成と機能が、時間とともに変化する可能性があるという点で、両方のモデルがあることを示唆している (Thompson2007³⁶・2013³⁷・Thompson and Turck2009³⁸)。 (以上、引用)

Martin Peter Walkerは、北アメリカのShell Ringを研究する際に常に考慮しなければならない主なポイントと研究の方向性について、次のように述べている (Walker2016³⁹)。

- Shell Ringの使用目的と継続的な維持は、空間的にも時間的にも変化している。
- Shell Ringの立地は、沿岸域へのアクセスと主要な内陸水路へのアクセスによって大まかには決定されるが、Ringの構造 (形状・大きさ・方向) は自然環境要因の影響を受けないようであり、人間の慣習によるものである。

かし、大規模なShell Ringは、饗宴の際に使用された貝殻が急速に積み上げられて形成されたものである。これらの貝殻は、おそらく個々の世帯ではなく、組織された集団によって一箇所に集められた可能性が高い。特に最大のShell Ringは、何らかの形で組織的な労働によって部分的または全体的に構築されたと推測される。Fig Island 2および3のShell Ringは、主に饗宴の廃棄物によって形成されたが、Fig Island 1では、他の場所で収集された貝殻が意図的に現場に運ばれ、特にShell Ringを高くするために利用されたとされている。このような特徴は、特に高度な社会的・組織的な労働力の関与を示唆している (Cable1997⁴³・Russo2002⁴⁴・Saunders 2002⁴⁵)。

Tuzinは、小規模なShell Ringおよびその構築初期段階は、平等主義的な組織を反映していると指摘している。この段階では、小規模な単独の廃棄物が偶然に廃棄され、積み上げられていったとされる。しかし、後の段階になると、饗宴の残滓によって形成された大規模な公共工事が行われ、これが遺跡の構築において何らかの組織的な指導が存在したことを示唆している。特に、最大規模のShell Ringの建設は、貝殻の採集や輸送、さらには階層的な社会組織を伴う労働集約的な公共事業プロジェクトとして進行していた可能性が高い。このようなプロジェクトの管理には、複雑な社会的連携が必要であったとされる (Tuzin 2001⁴⁶)。

Saunders他は、すべてのShell Ringが構築後に記念物としての役割を果たす可能性があるとは指摘している。しかし、特に大規模な組織的労働を伴うShell Ringは、その主な目的が記念物としての機能にあった点で特に際立っている。このことから、Shell Ringの構築方法を解明することは、それらの機能を理解するだけでなく、それを構築した社会の組織構造を理解する上で不可欠であるとされている (Saunders他 1994⁴⁷)。

Russoは、Shell Ringの築造に関して、Fig Island 1マウンドの調査で、貝殻の表層のすぐ下に砂が埋められていることを確認している。この現象は、Horr's IslandのマウンドBおよびDの調査でも同様に確認されている (Russo1991⁴⁸)。また、Gagliano他は、Claiborne Moundでは貝殻の使用がわずかであり、大部分が土によって構築されていることを報告している (Gagliano and Webb1970⁴⁹)。さらに、ボニータ湾のShell Ringマウンドにおいても、貝層の下に砂や土で構成されたコアマウンドが存在する可能性が指摘されている。これらの調査結果から、Shell Ringの構築において砂と貝の両方が意図的に使用されていることが確認されており、これが単なる食物残滓の無作為な廃棄ではなく、計画的な構造物であることを示唆している。

アルカイック時代中期および後期の人々がアメリカ南東部の内陸河川や沿岸地域に大規模な儀式用マウンドを建設していたことが明らかにされると、マウンド建設の重要性をめぐる議論は一層活発化している (Russo1994⁵⁰・Saunders他1994⁵¹)。一部の研究者は、移動性の狩猟採集民が、彼らの移住や平等主義的な生活様式を大きく変えることなく、マウンドを構築することが可能であったと主張している (Saunders2004⁵²)。一方、他の研究者は、多くのアルカイック時代のMound ComplexとShell Ringに共通する大規模で多数の構築には、公共事業が特に必要であるとして社会組織の変化を見ている (Russo2004⁵³・Sassaman and Heckenberger2004⁵⁴)。大規模な公共事業を遂行するためには、多数の労働力を組織化し、その構築を指導・強制するために、社会的階層の恒久的または一時的な確立が不可欠である。このように、アルカイック時代におけるアメリカ南東部の景観において、マウンドの出現は、平等主義からより複雑な社会組織への移行を示しており、ヨーロッパ文明との接触以前における社会発展の重要な特徴と見なされ

る。」(以上、引用)

(2) Mound Complex Siteについて

アメリカ南東部ルイジアナ州の内陸部の河川に沿って分布するMound Complexは、日本の環状盛土によく似ている遺構である。時代はアルカイック時代中期から後期である紀元前3400年から紀元前1000年頃であり、Shell Ringに先行して出現し、内陸部で展開している。

Watson Brake遺跡は、紀元前3400から紀元前3000年頃に構築された北米最古のMound Complexであり、2005年にJoe W. Saunders他が以下のようにまとめている (Saunders他2005⁵⁵)。(図5)

(以下、抜粋を翻訳して引用)

「ミシシッピ川流域に位置するアルカイック時代中期のMound Complexは、有名なPoverty Point Earthworkをはるかに凌ぐ最古の先例である。その中でも、Watson Brake遺跡は、最大かつ最も複雑なマウンドサイトである。放射性炭素年代測定とルミネセンス年代測定による広範囲のコアリングと層序の研究によると、紀元前3500年頃、最初の土木工事の全範囲はまだ知られていないが、小川のテラス中央の端に焼土の楕円形の配置に関連した小規模な工事が始まり、実質的な盛土が始まった。それが、紀元前3350年、そして紀元前3000年以降のある時期まで段階的に続いた。遺跡が放棄された時、11基のマウンドとそれらをつなぐ土塁は、表土に埋もれていた。表土には所々土壌が形成されていたが、石灰岩、被熱して割れた岩、そして焼成された粘土やロームの塊は表土のあちこちに散らばっていた。廃棄帯基礎からの動物相と花粉相は、堅果、魚、鹿を中心とした広範囲の食糧取得に支えられたオールシーズンの生業を示している。重なる盛土はすべて酸性が強いため、有機物は遺存していない。マウンドによって囲まれた領域は瓦礫の跡を残さず、儀式空間としての利用を示唆していた。そのような手の込んだ活動がここで最初に起こった理由は、捉えどころのないままである。しかしながら、いくつかの構築物の崩壊はデータ化されたエルニーニョ／南方振動 (ENSO) イベントの増加と非常によく連動している。ENSOの頻度がこのように急激に増加すると、降雨量は非常に不安定になり予測できなくなる。初期のマウンド構築行為は、干ばつや洪水と突然予測不可能となった食糧獲得事情の新たなストレスに対する共同の対応であった可能性がある。

一方、ミシシッピ州においては、時代が下がり、中期ウッドランド時代 (B.C100～A.D200) から後期ウッドランド時代 (A.D400年～1000年) に建設されたマウンドがあり、ミシシッピ時代 (A.D1000年～1700年) にもマウンドは建設されるが、用途及び社会背景が異なっているようである。

Boyd Mound Site、Bynum Mound and Village Site、Pharr Moundsなどは埋葬を伴い、長距離交易品である遺物が出土するという特徴がある。」(以上、引用)

Louisiana Division of Archaeologyによるとルイジアナ州には、マウンドのある遺跡が800か所以上あり、マウンドは州全体に見られるが、州の北東部と中央部に集中している。初期マウンドは13か所あり、その

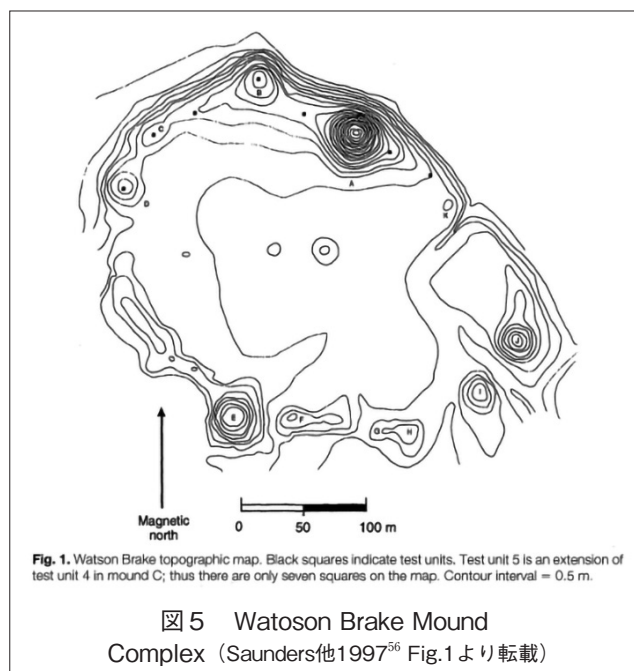


図5 Watson Brake Mound Complex (Saunders他1997⁵⁶ Fig.1より転載)

内の最大のマウンドがWatson Brakeである。Watson Brakeは土塁が11個のマウンドをつなぎ、楕円形を形成している⁵⁷。ルイジアナ州にはWatson Brakeのような中央広場を取り囲むように複数のマウンドがある遺跡がいくつかあるようである。また、ルイジアナ州では、16世紀ころまでマウンドを造り続けている。マウンドには円錐形、長方形など様々な形、大きさがあり、機能も儀式場、埋葬地、寺院、首長の屋敷地と様々である。初期のマウンドは丸い頂上であり、後の時代は頂上が平らになり、その上に寺院や首長の家が建てられていることもあった。

2 東京湾沿岸域の環状遺構との比較

(1) 環状貝塚とShell Ring (図6・図7)

東京湾沿岸域の環状貝塚とフロリダ半島沿岸域のShell Ringは、ともに周堤状の構築物であり、主に使用された貝殻がイボキサゴ(環状貝塚)とカキ(Shell Ring)の違いはあるものの周辺海岸で大量に採取できる貝であることは共通している。また、構造的に集落にともない生活と儀式を行った場所であったと推定されている説があることも共通している。サウスカロライナ州Stallings Islandの調査例では人の埋葬を伴っており、Shell Ringと環状貝塚の遺構としての性格は、ほぼ共通しているものと考えられる。形態も、環状=closed circle (ring)、馬蹄形=figure C、双環状(8字形)=figure 8というように日本での分類に対応するように同様の形態を示している。構築時期は、どちらも紀元前3000年から紀元前1000年頃であり、地球規模の気候環境は寒冷化傾向であり、海退期と考えられている。

特別史跡加曾利貝塚のこれまでの発掘調査成果によると、北貝塚には縄文時代中期から後期の住居跡があり、周堤部分には中期の住居の壁、後期の住居の床面が残っており、中央広場部分の後期の住居跡は壁や床面まで削平されていた⁵⁸。南貝塚には後期から晩期の住居跡があり、周堤部分の住居跡は壁が残っているが、中央窪地は削平され遺構は、ほぼない⁵⁹。北貝塚・南貝塚とも現状の地形が、継続行為の最終形態というよりも、環状集落として居住、埋葬、儀式を行っていた時期と、中央窪地を掘削するような大規模造成を行ってモニュメント化した時期があるように思われる。北貝塚は後期後半から晩期前半、南貝塚は晩期後半から晩期末に中央窪地を掘削し、土と貝殻とともに周堤を嵩上げし、完成させたと推定する。この解釈によると環状集落と環状貝塚となる遺跡は形成過程の違いで理解できる。集落のまま終わった遺跡とモニュメント化した遺跡の違いである。

史跡荒屋敷貝塚の中央部の発掘調査によると、縄文時代の竪穴住居の壁と古墳時代の竪穴住居の壁の遺存度が明らかに違っており⁶⁰、縄文時代の竪穴住居は、縄文時代以降、古墳時代以前に削平されていることがわかる。また、多数の土坑が検出されており、中央広場から土坑群、住居跡群が同心円状に配置される環状集落から中央部を削平し、縁辺部に周堤を築いた過程が推定できる。

環状・馬蹄形貝塚は、貝層範囲の形態から呼ばれているところもあり、台地上のマウンドで形成されているものと台地斜面への堆積で環状・馬蹄形になっているものがある。ここで扱う環状・馬蹄形貝塚は厳密には加曾利貝塚のような台地上のマウンドによって形成されているものを想定しているが、集落中央を窪地化して周囲に貝等を堆積させる意味では、台地上の周堤状貝塚も斜面貝層堆積貝塚も思想行為としては同様の意図を持っている可能性も否めない。

(2) 環状盛土とMound Complex (図5・図8)

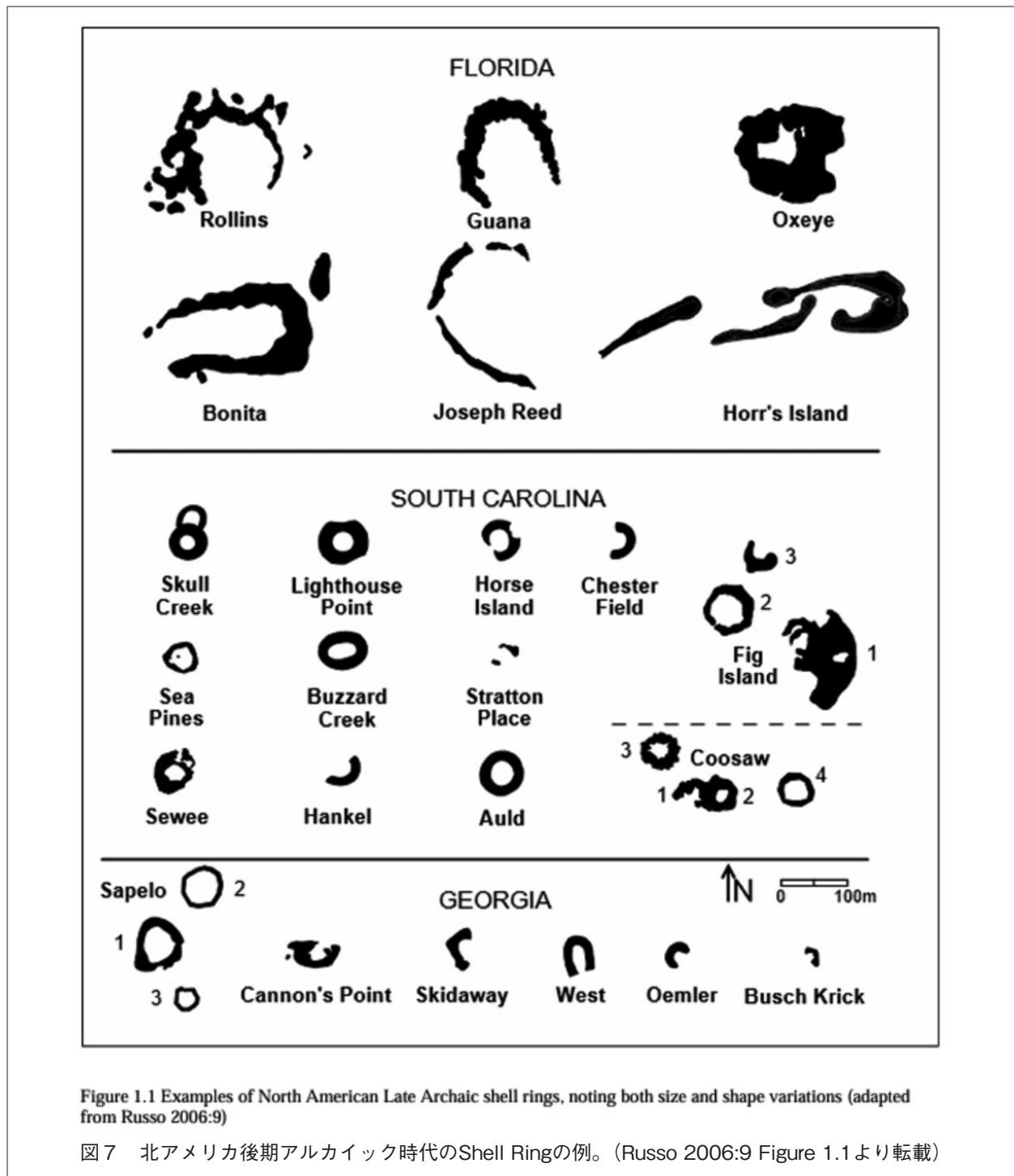
環状盛土とMound Complexは、マウンドと土塁で構成され、内陸部に立地していることが共通してい

<p>第2図 東金野井貝塚</p>	<p>第4図 山崎貝塚</p>	<p>第5図 野田貝塚</p>	<p>第8図 上新宿貝塚</p>
野田市東金野井貝塚	野田市山崎貝塚	野田市野田貝塚	流山市上新宿貝塚
<p>第9図 上貝塚貝塚</p>	<p>第10図 三輪野山貝塚</p>	<p>第6図 中沢貝塚</p>	<p>第7図 姥山貝塚</p>
流山市上貝塚貝塚	流山市三輪野山貝塚	鎌ヶ谷市中沢貝塚	市川市姥山貝塚
<p>第3図 藤崎堀込貝塚</p>	<p>第11図 犢橋貝塚</p>	<p>第13図 園生貝塚</p>	<p>第14図 草刈場貝塚</p>
習志野市藤崎堀込貝塚	千葉市犢橋貝塚	千葉市園生貝塚	千葉市草刈場貝塚
<p>第17図 荒屋敷貝塚</p>	<p>第15図 花輪貝塚</p>	<p>第16図 多部田貝塚</p>	<p>第41図 月ノ木貝塚</p>
千葉市荒屋敷貝塚	千葉市花輪貝塚	千葉市多部田貝塚	千葉市月ノ木貝塚
<p>第12図 有吉南貝塚</p>	<p>第66図 六通貝塚</p>	<p>第64図 菱名貝塚</p>	<p>第65図 築地台貝塚</p>
千葉市有吉南貝塚	千葉市六通貝塚	千葉市菱名貝塚	千葉市築地台貝塚
<p>第67図 誉田高田貝塚</p>	<p>第72図 山倉貝塚</p>	<p>第73図 能満分区貝塚</p>	<p>第78図 鬼子母神貝塚</p>
千葉市誉田高田貝塚	市原市山倉貝塚	市原市能満分区貝塚	市原市鬼子母神貝塚



る。環状盛土は、井野長割遺跡や三直貝塚などに一部貝層が観察されるものもあり、東京湾岸においては、縄文時代後期から晩期に環状貝塚の縁辺部に展開している傾向がある。また、同種の環状盛土は、栃木県、埼玉県の台地上に展開している。一方、Mound Complexは、ミシシッピ川中流域に分布し、Shell Ringにやや先行して出現したとされている。

環状盛土を有する遺跡について黒坂禎二は、18遺跡の集落構造を分析し、円環分域と放射分節、集落の収斂化を想定している(黒坂2023⁶¹)。これによると「大宮台地南東から下総にかけて多くが後期中葉後半以降に長短軸比4:3の相似形で収斂されていきます。分布の南西端となる上総域では、佐倉市宮内井戸作遺跡や市原市祇園原貝塚のような5:3も生まれます。逆に、大宮台地中央から北半にかけての雅楽谷・後谷・桶川市高井東遺跡では3:2も認められます。このように、収斂形は、この楕円3域に長竹・寺野



東遺跡などの北の円を加えた4つの地域相があるのです」と指摘しており、「この期に幾何的な集落構成の設計基準（規制）が存在したと確信できるでしょう」としている。

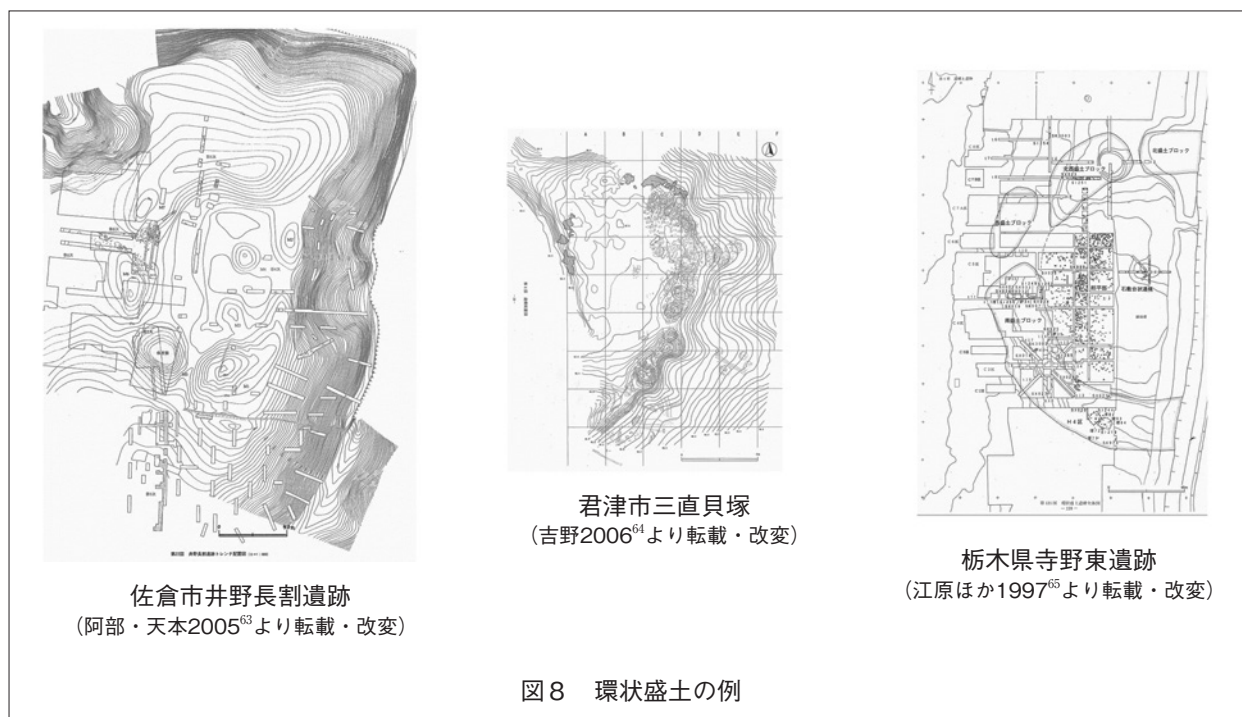
この指摘では、あたかも集落造営開始時期に環状盛土遺構の最終形態を意図していることになる。しかし、加曽利北貝塚・南貝塚の調査例では、中央窪地部分に削平された住居が存在しており、厳密な設計基準（規制）が当初から存在したとは想定できない。中央広場を巡る緩やかな環状形態の集落は想定できるが、盛土遺構を含む最終形態は、集落の廃絶前後に意図して造営されていると考えられる。円環分域は、中央

部削平の結果、生じたものであり、事実、長竹遺跡の分域を越えた墓壙の分布の説明がつかない。放射分節についても盛土マウンドの造営結果によって視覚的に認知できるが、それが居住期の単位として存在していたか、さらなる検証が必要である。集落と環状盛土は二重構造であり、中期の伝統を引く円形集落と後期の楕円形集落によって盛土の位置が規制されているとも考えられ、その形態の意図するものが何であったのが疑問である。また、地域による収斂化の意図するものは何であろうか。生物は、種が異なっても生存戦略のために形態が収斂されていく。地域による集落の収斂化は、地域社会の違いの反映とみることができのだろうか。

埼玉県長竹遺跡では、縄文時代後期から晩期に形成された環状盛土遺構が発見され、「発見された住居跡は盛土中に重層しており、各時期の住居跡の占地に規制があったことも推察できる。盛土の構築は晩期中葉に終焉を迎えるが、その最終段階に一部の地区をローム質土で封土した痕跡も確認できた⁶²」とされている。住居跡の盛土中の重層は、各時期の住居跡の占地にある程度の規制があったものと思われるが、中央窪地の掘削による結果の可能性があり、最終段階のローム質土の封土を掘削した際に中央部の住居跡が削平されているため、より規制が強く見えるのだと思われる。

環状盛土も寺野東遺跡や井野長割遺跡のように明確なマウンド群で構成されているものと台地上のマウンドは低く、斜面にかけて盛土をしている三直貝塚のような例がある。あたかも周堤状貝塚と斜面貝層堆積貝塚に対応するような環状盛土があることは、ますます環状貝塚と環状盛土は同一思想による構築物である可能性が高いと思われる。

Mound Complexは、太陽周期を意識した儀式場であると認識されているほか、最古のWatson Brakeの目的は未解明であり、造ること自体が目的であったとも考えられている。重要なのは、共同作業による構築物であるという点である。



(3) 環状遺構の世界的分布の意味するもの

環状貝塚、環状盛土、環状列石など縄文時代並行期の環状遺構は、イギリス、アイルランド、フランス、ドイツ、オランダ、スウェーデン、ノルウェー、フィンランド、ポルトガル、日本、アメリカなどで確認されており、中東・アジアの状況は不明確ながらヨーロッパ・アメリカ・日本など北半球に分布しているようである。

環状列石の「場」の機能として、「葬祭場」説、「拡散型集落」説がある（阿部2011⁶⁶）。集落の定義の問題であり、同時期の構成遺構に常住住居と認定できるものがあるかどうかで単独葬祭場か集落内葬祭場かになるだけであり、葬祭場説と集落説は対立するものではない。環状列石という構築物の意味を捉えないと場の機能はわからない。埋葬施設と祭祀系遺物の出土と共同作業を類推させる計画的な環状列石という構築物の存在は、明らかに葬祭場の機能を持っていることは疑いのない事実である。それを単独のムラで行っているか、複数のムラムラで行っているかで社会のあり方が違って見えるのではないだろうか。

環状貝塚も同様に集落と葬祭場の二重構造を持っている。環状盛土も同様である。

阿部は、環状列石の定義や範囲について、系統・系譜を考慮する狭義の分類法を採用するとし、「中期末葉から後期初頭の関東甲信越地方の例と後期前葉の東北北部の事例と、後期前葉の北関東・信州地域の例に相互に系統・系譜関係は認められない。つまり、いずれも空間的・時間的に断絶があり、連続性が確認できないのである」としている⁶⁷。この指摘は、環状列石は空間的・時間的に断絶して現れるものであることを示唆している。これは、世界規模で環状遺構が空間的・時間的に断絶して出現することと同様であり、どのような条件で出現するのかを調査することにより、環状遺構が人類史における「何か」のメルクマールになり得ることにつながる。

3 まとめ

(1) 類似性が物語るもの

環状記念物は、先史時代の人口集中地域に出現し、様々な資材によって構築されている。貝や石が遠隔地から運搬されていたり、土の掘削が大規模に行われていたりするように資材調達や構築にかなりの労力を要することから継続的な共同作業が行われていたことは確実である。

一方、カリフォルニア州の貝塚について、Kent G Lightfoot他は、次のような見解を示している。

「我々の評価によると、カリフォルニアの貝塚は、アメリカ南東部の狩猟採集民グループが作ったモニュメント的建造物とは、その歴史において大きく異なっている。大規模な共同集会中に、1回または複数回の急速な建設工事で計画的に建設されたという証拠はほとんどない。むしろ、カリフォルニアの貝塚は、数百年から数千年かけて積み上げられた付加的な貝塚堆積物である。貝塚堆積物の多くは、居住や葬儀の儀式を含む現地での日常活動によって生じたものである。建築上の精緻化や計画を示す証拠はほとんどなく、遺跡のほとんどは比較的不定形の貝塚であるように思われる。したがって、カリフォルニアの貝塚は、アメリカ南東部や世界の他の地域で記録されているような、意図的な独立したモニュメントではないようだ。カリフォルニアの貝塚は、他の目的を持ったモニュメント的な場所とは大きく異なるが、狩猟採集社会を研究する他の考古学者にとって重要なモニュメント的場所への代替的な道筋を示していると私たちは考えている。サンフランシスコ湾の貝塚は、人々が何世紀にもわたってさまざまな文化的慣習を行い、景観に永続的で認識可能な特徴を生み出した永続的な場所であると考えている。これらの場所のモニュメン

ト的性質は、地元のコミュニティーの交流と慣習を通じて、その景観を特徴づけ、重要な記憶と意味を生み出すことで、何世代にもわたってその場で発達した。PauketatとJoyceの両者が私たちに想起させてくれるように、モニュメントの最初の造営には、エリートによる計画や監督は必要ない（Pauketat⁶⁸2000・Joyce2004⁶⁹）。サンフランシスコ湾沿いに住む社会集団による反復的で日常的な慣習が、独特の空間を作り上げ、時を経て景観上の重要な場所となることで、同様の「意図しない結果」を生み出したと私たちは主張する（Osborne2014⁷⁰）。意図、エリート、階層的な権力構造に焦点を当てたモニュメント性に関するトップダウンのアプローチとは対照的に、カリフォルニアのケーススタディは、ダイナミックなマウンドの景観のさまざまな反復が徐々に出現するにつれて、地元の場所との相互作用と意味が時間とともに変化した地元コミュニティの生活経験を含むボトムアップの視点の例である。貝塚は地元コミュニティにとって複数の目的を果たした可能性があり、これらの役割は遺跡の存続期間を通じて頻繁に変化したことを強調することが重要である（Randall他2014⁷¹）。Pluckhahnらは、モニュメントと貝塚をあまりに区別しすぎないように警告している（Pluckhahn他2015⁷²）。なぜなら、どちらも多様な文化的慣習を通じて作られる可能性があるからである。ある時代と場所では、貝塚は日常での使用や廃棄物による貝殻の堆積によって作られるかもしれないが、他の場合には、貝殻を多く含む堆積物は、埋葬の儀式、共同の宴会、その他の重要な象徴的価値を持つ活動を通じて築かれることがある。たとえば、Randallは、フロリダ州セントジョンズ川沿いの貝層を多く含む遺跡について説明している。これらの遺跡は、住居としての使用と、埋葬や儀式を含む大規模な建築イベントが交互に繰り返される堆積サイクルで建設された（Randall2011⁷³）。エリスランディング貝塚の資料の分析は、時間の経過とともに変化する「貝塚」建設の意味と意図についての洞察を提供する。すでに述べたように、この貝塚の場所には、主に基底層（層D、C）に多数の埋葬地があった。特に層Cでは埋葬習慣が重視されていたが、その後、居住コミュニティに関連する日常活動に重点が置かれるようになった。PauketatとAltが強調しているように、場所の社会的記憶に関する視点の変化や、現在の社会的、政治的、儀式的慣習の変化により、人々は景観上の重要な場所の意味を世代ごとに変える可能性がある（Pauketat and Alt2003⁷⁴）。エリスランディング貝塚の意味は時間とともに変化した可能性が高いため、このマウンドは、いわゆる「状況上のモニュメント性」において独自の前後関係の中で検討されるべきであると私たちは主張する。（同様の議論についてはOsborne2014⁷⁵を参照）。マウンドの当初の建設には事前に計画された構造は含まれていなかった可能性が高いが、何世紀にもわたる継続的な使用の最終産物は「モニュメント的な」マウンドとなり、考古学的記録が示唆するように、その意味と機能は時間の経過とともに変化した可能性が高い。特に、エリスランディング貝塚で発生した出来事は、モニュメント性が一夜にして生じたものではなく、モニュメント性が最初から意図された結果ではなかったことを浮き彫りにしている。しかし同時に、B層の居住中に重要な「モニュメント性の閾値」を超えた可能性があると思われる。具体的には、エリスランディング貝塚は、D層とC層に居住していた当時はモニュメント的な場所として形成されていなかったが、B層に居住していた間に重要な機能の変化が起こった。この場所は、過去に埋葬地としての特徴が顕著であったにもかかわらず、次第に居住地としての機能を有するようになった。埋葬地と居住地の境界が徐々に曖昧になったことは、この場所の持つ付加的な性質と深く関連していると考えられる。この事実は、場所がいかにしてモニュメント化するか、また、いつ、どのような形でモニュメント的性質を投影するかについて、より複雑な理解が求められていることを示唆している（Lightfoot他⁷⁶）

カリフォルニア州の貝塚についての解釈は、日本列島の大半の貝塚に当てはまるものと思われる。時間とともに変化する意味と機能を理解していくことが重要である。

フロリダ半島のShell RingについてKenneth E. Sassaman他は、季節を限定するトキの幼鳥骨の一括出土土坑の存在から夏至の祭りの場であったとし、埋葬や世界再生の儀式と祝宴を地域の共同行事として大規模に行っていたと考えている（Sassaman他2019⁷⁷）。Shell Ringへの定期的な集合と共同行事には地域全体に分散したコミュニティーのネットワークを再構築する役目があり、それを可能にするのは、天文周期に合わせた儀式の実施時期は、あらかじめ決められているからであるとしている。また、儀式の場所が何千年もの間、死者の埋葬にも使われてきたことは偶然の一致ではなく、歴史的聖地としての認識が、貝塚で儀式が行われる環境を整えたとしている。

夏至の祭りについては、現代において北欧・ヨーロッパ諸国で伝統的に行われている。日本では三重県伊勢市二見興玉神社において夫婦岩の間から昇る太陽を拝する祭りが行われている。

イギリスのストーンヘンジにおいても夏至を祝うイベントが行われているが、このイベントが開催されるようになったのは最近のことである。大英博物館によると、ストーンヘンジは1700年代初頭にウィリアム・ストークリーによって夏至の日の朝日の軌道が再発見されたが、観光客が集まり始めたのは1860年代になってからであるとのことである。ストーンヘンジは、夏至の日の出と冬至の日の入りを視覚的に演出し、儀式を行った施設であると考えられている。また、ストーンヘンジの初期段階にあたる場所には、150体から200体ほどの火葬人骨の埋葬も確認されている。イギリスでは、紀元前4100年頃、ヨーロッパ大陸から農耕が伝わったとされている。紀元前3900年頃にストーンヘンジの近くで開かれた饗宴の遺跡では、狩猟採集民と初期農耕民の共同体との間の交流が伺える家畜化された牛と狩猟された鹿の骨が出土し、肉は異なる方法で調理されていたことが示されている。約200km離れたウェールズ産出のブルーストーンや北イタリアアルプス産出の石斧など遠隔地からの搬入品の存在は、広域交流が活発化した時代であることを裏付ける。ストーンヘンジ周辺は、重要な交流の場であり、社会の転換点でもあり、狩猟採集民の生活様式の終わりを告げている遺跡であるともされている（The British Museum 2022⁷⁸）。

天文周期に合わせたイベントの特徴は、Sassaman他が指摘するように開催日があらかじめ決められているところに特徴がある。つまり、開催日を誰かが決定し、伝達することなしにイベントを開催できるわけであり、このことが、環状貝塚や環状列石等の大規模構築物を生み出した要因の一つであると考えられる。暦が整った現代においては、地域の祭りが何月何日と決まっていたり、近年においては何月の第何日曜日とかに決められていたりすることに通じている。あらかじめ祭りの開催日が決められていたら参集すべき人々は自然と参集することとなる。交易を行うことにも参集日の特定は、都合がよかったことであろう。

環状貝塚とShell Ringは、居住、埋葬、儀式を長期に渡って行っていた地域の拠点集落である。類似した遺跡は類似した文化の痕跡であり、自然環境と生業、人々の志向の共通性を示すものである。

縄文時代中期から後期は、狩猟採集の時代に最も集落数が増えた時期であり、房総半島・フロリダ半島ともに堅果類・陸上動物などの森林資源、魚介類などの海産資源等の食料資源が豊富に調達できる環境にあった。共通するのは、環状構造を持つ集落を形成し、最終形態は集落を覆うように貝殻や土を積み上げ、中央部を削平する行為を行ったことである。また、埋葬人骨、祭祀遺物、遠隔地の交易品が検出されている点も共通している。

人口増による集落の拡散と拠点集落の形成が基本にあり、拠点集落での共同祭祀と共同作業の必要性が

環状貝塚や環状盛土を生み出したと考えるのが妥当である。

しかし、その後の日本列島は中国文明の影響下に置かれ、北米大陸は太平洋と大西洋に挟まれた地理的環境から文明の影響を受けることなく、それぞれ異なる歴史を辿っていくことになる。水稻耕作を受容するとともに東アジア文化圏の古代国家となった日本の文明接触前の縄文文化を研究するには、他の文明の影響を受けることなく首長制社会へと移行していった北米地域は、最も参考となるものと考えられる。

イギリスのストーンヘンジは、狩猟採集社会から農耕社会へ転換する時代の産物である。そこには、狩猟採集民と初期農耕民の交流があり、遠隔地からの人と物の移動、人の埋葬、モニュメント造営の大規模共同作業は、社会の複雑化を進めたものと思われる。

なお、「ヘンジ」という用語は、1930年代初頭に大英博物館の学芸員であったトーマス・ケンドリックによって造られた造語である。この用語は、約5,000年前にイギリス、アイルランド、ドイツ、フランスで造営が始まった神聖な空間を囲む一連の儀式用モニュメントを指すために使用されている。これらのモニュメントは、通常、円形または楕円形の溝や土手によって定義され、その形状が特徴的である。

北米大陸には、Medicine Wheelと呼ばれるストーンサークルが存在し、アメリカ合衆国北部とカナダ南部のサウスダコタ州、ワイオミング州、モンタナ州、アルバータ州、サスカチュワン州で発見されている。カナダのアルバータ州に所在するMajorville Cairn and Medicine Wheelは、紀元前3,200年頃のものとしてされている。2,000年以上の長期の追加構築の痕跡があり、機能が時間とともに変化したと考えられている⁷⁹。

環状貝塚の造営の終わる縄文時代晩期後半は、水稻耕作が伝播する時期である。

環状記念物は狩猟採集社会の末期に登場することがわかった。膨大な労働力を伴う造営、遠隔地との交易、祖霊祭祀、天体祭祀を行い、平等な狩猟採集社会の終焉と階層的な食糧生産社会の萌芽を示す記念物である。

環状貝塚、Shell Ring、環状盛土、Mound Complexは、時代、経済、社会、環境、立地、形態など共通するものは多く、地域や主な構築資材が異なるものの、同一のイデオロギーで構築されたモニュメントであると考えられる。中央に広場を有し、マウンド下には多数の住居跡が存在し、埋葬を伴い、長距離交易品である遺物が出土するという特徴も共通しており、拠点集落からモニュメントへと姿を変えていった動的意味合いを持つ遺跡である。

空間的断絶のある同時期の日本とアメリカで極めて類似性の高い構築物が存在していることは、注目すべきことである。また、イギリスやヨーロッパでもヘンジという類似性の高い環状モニュメントが構築されていることは、社会の発展段階における人類行動の共通性が指摘できる。このことは、モニュメントの構築というイデオロギーを可視化させる作業として、社会の複雑化と連動している可能性が高い。これは、集団の中から首長が出現する際の背景として、世界的に見られる現象であるということが出来る。日本においても農耕の開始が首長を出現させたのではなく、狩猟採集段階のモニュメント構築の事業と儀礼行為が首長を出現させ、農耕を受け入れて食糧生産経済に入ったと考えるべきである。権力者は、農耕社会が生み出すものではなく、生産・採集経済を問わず、大規模な共同作業と儀礼行為が組織的な慣習となったところから発生するものであると考える。

(2) 環状記念物形成期とその後の社会

加曽利北貝塚では、令和5年度の調査において中央広場平坦部で縄文時代後期の床面が削平され柱穴のみ残存した住居跡が検出されている。また、貝層範囲下の地点では、後期の住居の床面らしき硬化面が検出され、その下から中期の住居跡が検出されている。これによって、中央平坦部は後期加曽利B式期以降のある時点で大規模に削平されていることがわかった。また貝層範囲の周堤部は後期以降、さらに盛り上げられていることが明らかとなった。

加曽利北貝塚は、中期中葉～後期後葉まで集落として存在しながら、埋葬や祭祀を行い、貝層の形成、盛土の構築を行っていた後、後期後葉以降、中央平坦部の削平と周辺部への盛土。貝の集積により、周堤状環状貝塚を築き上げている。おそらく安行式期に集落の主体を南貝塚に移し、北貝塚がモニュメント化したものと推察する。

加曽利南貝塚は後期後葉から晩期前葉に集落の主体となり、晩期前葉以降に中央部を削平している。

環状集落と周堤状環状貝塚の違いは、最終的に中央広場を削平し、貝と土で周堤を嵩上げするかどうかである。

周堤状環状貝塚は、縄文時代中期中葉から中期末、後期中葉から晩期に環状集落を覆うように形成されている。環状盛土は、縄文時代後期から晩期に環状集落を覆うように形成されている。北海道・東北北部地方の環状列石は、集落から墓域と祭祀場が独立して縄文時代後期に形成され、晩期には単独の祭祀場として形成される。

環状記念物の造営の終わる縄文時代晩期後半以降は、食料生産に生業の主力が移り、集落構造の変革があったものと推察する。

例えば、現代において、都市部では住宅地、霊園、葬祭場（セレモニーホール）がそれぞれ独立した存在として機能している一方、農村部では住宅が葬祭場を兼ねたり、屋敷墓が個別に存在するなど、集落の構造は異なっている。しかし近年では、住宅での葬祭が減少し、墓も霊園に移されるケースが増えている。このように、歴史的な集落構造が、社会環境の変化によって徐々に変質していく様子が確認されている。主要な要因として挙げられるのは、人口減少である。かつてのニュータウンでは空き家が目立つようになり、小規模な商店も次第に姿を消している。今日の社会は、大規模営農の生産地と主要都市部の消費地が中心となる社会構造へと移行しており、地方や山間部の集落は限界を迎えている。縄文時代晩期後半以降の社会構造の変化も、これと同様に、自然環境や経済的要因による影響を受けたと考えられる。狩猟採集経済では山林や海が重要な資源であったが、食糧生産が経済の中心となると、台地や平地における水利の確保が集落の立地において重要な要素となったと推測される。また、房総半島では、縄文時代晩期後半に東北地方や東海地方からの土器の搬入が顕著になっている。この時期の文化的な流入や拡散に伴い、他地域からの生活用品や影響を受けた物品が集落に搬入されたことは、人々の移動を示唆している。このような文化の交流や変化は、新たな社会構造や生活様式の導入を反映していると考えられる。

(3) おわりに

環状貝塚・環状盛土が存在する遺跡の意味と機能は、時間の経過とともに集落、祭祀場、モニュメントと変化した可能性が高い。また、集落時においても居住域や墓域などの分域規制が時期ごとに変化しており、これは円環分域や放射分域から外れた遺構や削平された遺構の存在によって説明できる。

Pluckhahnらが、フロリダ半島の環状貝塚について、モニュメントと貝塚をあまりに区別しすぎないように警告しているように（Pluckhahn他2015⁸⁰）、環状貝塚・環状盛土を有する遺跡の性格は、時間の経過とともに変化していったとみるべきである。

日常での使用や廃棄物による貝殻の堆積によって造られる貝層、埋葬の儀式・共同の宴会・その他の重要な象徴的価値を持つ活動を通じて貝殻を多く含む堆積物により築かれる貝層、中央広場の削平によって生じた土により築かれる盛土層などが複合しているのが環状貝塚の実態であり、貝殻を含まない日常廃棄物・象徴的活動廃棄物と盛土によって築かれるのが環状盛土の実態である。それが、偶発的に行われたままの遺跡とある時点で意図的に行われるようになり、周堤状の貝塚や盛土となった遺跡があるということである。その「ある時点の意図」が、環状列石造営の意図と同様の思想であるとの見解もある。

狩猟採集社会において、安定した食料資源の獲得による定住は、人口増加と集落の拡大・拡散をもたらすとともに地域全体に分散したコミュニティーのネットワークの再構築のための拠点集落への定期的な集合と共同行事の開催を行った結果が環状遺構となったものであると考える。定期的な集合の目的が夏至や冬至の天体祭祀であった可能性や共同行事としての葬祭その他の祭祀、祭祀場整備のための中央広場の掘削と環状貝塚・環状盛土の造成は、ある時点から一体のものとして慣習化されていたものと思われる。それらは、当時の社会状況を推定することができる歴史的記念物として十分評価できるものである。東京湾沿岸域とアメリカ南東部域で環状貝塚・環状盛土、Shell Ring・Mound Complexという極めて類似性の高い遺跡が形成された背景を考えると、狩猟採集民の長期定住化と集落の環状規格化があり、中央窪地と周堤を築く最終形態をある時点で意図していることが明らかである。また、海産資源獲得の多寡により貝と土の資材としての調達割合の違いで貝塚と盛土になることは地理的分布をみても明らかである。よって、紀元前3,000年から紀元前1,000年頃の地球上において、東京湾岸とアメリカ南東部は最も文化的に類似していた地域であったといえる。

環状記念物は、定住性狩猟採集社会における人口増加とともに形成され、社会の階層化を促進したものである。その歴史的意義は、初期階層化社会の形成を示す指標となるものである。

あとがき

公益財団法人千葉県教育振興財団に在籍していたのは、千葉県文化財センターだった頃の昭和62年度から平成8年度の10年間です。また、現在、再任用として成田空港のさらなる機能強化整備に係る調査に携わっています。当財団の発掘調査は、世界的にみても特筆すべき規模を誇り、過去の集落景観の全体的な復元や広域な土地の時代的変遷の解明を通じて、考古学や地域史に多大な貢献をしています。近年では、デジタル技術とインターネットにより世界中の情報が容易に入手できるようになり、グローバルな視点で遺跡を研究することが可能になりました。特に先史時代の研究において、国際比較は非常に有効であると感じています。房総半島にたどり着いた人類が、どのように生きてきたのかを解明することは、考古学が主導的に取り組むべき重要なテーマであり、千葉県全域を調査対象としている当財団の使命であると考えています。

引用・参考文献

- ¹ 千葉県教育委員会 令和3 (2021)『千葉県内縄文時代集落・貝塚詳細分布調査報告書』
- ² Torben C.Rick 2024 Shell Midden Archaeology: Current Trends and Future Directions ,Journal of Archaeological Research 32(3)309-366
- ³ 高梨俊夫 2018「環状貝塚の本質 - 特別史跡指定に寄せて加曽利貝塚を考える - 」『貝塚博物館紀要』第44号千葉市立加曽利貝塚博物館
- ⁴ 高梨俊夫 2019「環状貝塚論-周堤状貝塚の成立と歴史的評価-」『貝塚博物館紀要』第45号千葉市立加曽利貝塚博物館
- ⁵ Russo Michael, Gregory Heide, 2001 Shell rings of the southeast US. *Antiquity* 75(289) PP. 491-492
- ⁶ Joe W.Saunders, Rolf D.Mandel, Roger T.Saucier, E.Thurman Allen, C.T.Hallmark, Jay K.Johnson, Edwin H.Jackson, Charles M.Allen, Gary L.Stringer, Douglas S.Frink, James K.Feathers, Stephen Williams, Kristen J.Gremillion, Malcolm F.Vidrine, Recca Jones 1997 A Mound Complex in Louisiana at 5400-5000 Years Before the Present, *SCIENCE VOL277,PP.1796-1799*
- ⁷ Martin Peter Walker 2016 *Tracking Trajectories:Charting of Late Archaic Shell Ring Formation and Use University of Tennessee,Knoxville*
- ⁸ Drayton,John 1802 *A View of South Carolina, As Respects Her Natural and Civil Concerns.*
- ⁹ Moore,Charles B 1897 Certain aboriginal mounds of the Georgia Coast,*Journal of the Academy of Natural Science of Philadelphia* 11(1):4-138
- ¹⁰ Crusoe, Donald and Chester DePratter 1976 A New Look at the Georgia Coastal Archaic.*The Florida Anthropologist* 29(1):1-23
- ¹¹ Cable,John S. 1997 *The Ceremonial Mound Theory:New Evidence for the Possible Ceremonial Function of Shell Rings.From South Carolina Archaeology Week Poster,Shell Rings of the Late Archaic. South Carolina Institute of Archaeology and Anthropology, University of South Carolina, Columbia.*
- ¹² Russo,Michael 2004 *Measuring Shell Rings for Social Inequality. In Signs of Power: The Rise of Cultural Complexity in the Southeast, edited by Jon L. Gibson and Philip J. Carr, pp.26-70. University of Alabama Press: Tuscaloosa.*
- ¹³ Anderson, David G.,Michael Russo, and Kenneth E.Sassaman 2007 *Mid-Holocene Cultural Dynamics in Southeastern North America. InClimate Change Cultural Dynamics; AGlobal Perspective on Mid-Holocene Transitions, edited by David G. Anderson, Kirk A. Maasch, and Daniel H. Sandweiss, pp.457-489. Academic Press, New York.*
- ¹⁴ Anderson, David G., and Kenneth E. Sassaman 2012 *Recent Developments in Southeastern Archaeology; From Colonization to Complexity. The SAA Press; Washington D.C.*
- ¹⁵ Gibson, Jon L. and Philip J. Carr 2004 *Big Mounds, Big Rings, Big Power. In Signs of Power:The Rise of Cultural Complexity in the Southeast, edited by Jon L. Gibson and Philip J. Carr, pp.1-9. University of Alabama Press: Tuscaloosa.*
- ¹⁶ Russo, Michael 1994 *Why We Don't Believe in Archaic Ceremonial Mounds and Why WeShould: The Case From Florida. Southeastern Archaeology* 13:93-109
- ¹⁷ Russo, Michael 2004 *Measuring Shell Rings for Social Inequality. In Signs of Power: The Rise of Cultural Complexity in the Southeast, edited by Jon L. Gibson and Philip J. Carr, pp.26-70. University of Alabama Press: Tuscaloosa.*
- ¹⁸ Anderson, David G. 1996 *Modeling regional settlement in the Archaic period southeast. In Archaeology of the Mid-Holocene Southeast, edited by Kenneth E. Sassaman and David G. Anderson, pp.157-176. University Press of Florida, Gainesville.*
- ¹⁹ Sassaman, Kenneth E. 2010 *The Eastern Archaic Historicized. Altamira Press, New York.*
- ²⁰ Steponaitis, Vincas P. 1986 *Prehistoric Archaeology in the Southeastern United States, 1970-1985. Annual Review of Anthropology* 15:363-404
- ²¹ Martin Peter Walker 2016 *Tracking Trajectories: Charting of Late Archaic Shell Ring Formation and Use University*

- of Tennessee, Knoxville
- ²² Anderson, David G. and Kenneth E. Sassaman 2012 *Recent Developments in Southeastern Archaeology: From Colonization to Complexity*. The SAA Press; Washington D.C.
- ²³ Russo, Michael 1994 *Why We Don't Believe in Archaic Ceremonial Mounds and Why We Should: The Case From Florida*. *Southeastern Archaeology* 13:93-109
- ²⁴ Sassaman, Kenneth E. 2010 *The Eastern Archaic Historicized*. Altamira Press, New York.
- ²⁵ Russo, Michael 2004 *Measuring Shell Rings for Social Inequality*. In *Signs of Power: The Rise of Cultural Complexity in the Southeast*, edited by Jon L. Gibson and Philip J. Carr, pp.26-70.
- ²⁶ Russo, Michael and Gregory Heide 2001 *Shell Rings of the Southeast US*. *Antiquity* 75(289):491-492
- ²⁷ Russo, Michael and Gregory Heide 2003 *Mapping the Sewee Shell Ring*. Shell Ring. Report Submitted to the Francis Marion and Sumter National Forests, South Carolina. Copy on File, Southeast Archeological Center. National Park Service, Tallahassee.
- ²⁸ Sassaman, Kenneth E. 1993 *Early Pottery in the Southeast: Tradition and Innovation in Cooking Technology*. The University of Alabama Press: Tuscaloosa.
- ²⁹ Russo, Michael 2004 *Measuring Shell Rings for Social Inequality*. In *Signs of Power: The Rise of Cultural Complexity in the Southeast*, edited by Jon L. Gibson and Philip J. Carr, pp.26-70. University of Alabama Press: Tuscaloosa.
- ³⁰ Russo, Michael 2002 *Architectural Features at Fig Island*. In *The Fig Island Ring Complex(38CH42): Coastal Adaptation and the Question of Ring Function in the Late Archaic*, edited by Rebecca Saunders and Michael Russo, pp. 141-153. Grant 45-01-16441, South Carolina Department of Archives History, Columbia.
- ³¹ Russo, Michael and Gregory Heide 2003 *Mapping the Sewee Shell Ring*. Shell Ring. Report Submitted to the Francis Marion and Sumter National Forests, South Carolina. Copy on File, Southeast Archeological Center. National Park Service, Tallahassee.
- ³² Russo, Michael and Gregory Heide 2001 *Shell Rings of the Southeast US*. *Antiquity* 75(289):491-492
- ³³ Russo, Michael 2004 *Measuring Shell Rings for Social Inequality*. In *Signs of Power: The Rise of Cultural Complexity in the Southeast*, edited by Jon L. Gibson and Philip J. Carr, pp.26-70. University of Alabama Press: Tuscaloosa.
- ³⁴ Russo, Michael and Gregory Heide 2003 *Mapping the Sewee Shell Ring*. Shell Ring. Report Submitted to the Francis Marion and Sumter National Forests, South Carolina. Copy on File, Southeast Archeological Center. National Park Service, Tallahassee.
- ³⁵ Saunders, Rebecca 2004 *The Stratigraphic Sequence at Rollins Shell Ring: Implications for Ring Function*. *Florida Anthropologist* 57(4):249-268.
- ³⁶ Thompson, Victor D. 2007 *Articulating Activity Areas and Formation Processes at the Sapelo Island Shell Ring Complex*. *Southeastern Archaeology* 26(1):91-107.
- ³⁷ Thompson, Victor D. 2013 *Whispers on the Landscape*. In *The Archaeology and Historical Ecology of Scale Economies*, edited by Victor D. Thompson and James C. Waggoner, Jr., pp.1-13. University Press of Florida, Gainesville.
- ³⁸ Thompson, Victor D. and John Turck 2009 *Adaptive Cycles of Coastal Hunter-Gatherers*. *American Antiquity* 74(2):255-278.
- ³⁹ Martin Peter Walker 2016 *Tracking Trajectories: Charting of Late Archaic Shell Ring Formation and Use* University of Tennessee, Knoxville.
- ⁴⁰ Southeast Archeological Center National Park Service 2002 *Archaic Shell Rings of the Southeast U.S. National Historic Landmarks Historic Context*.
- ⁴¹ Kelly, Robert L. 1995 *The Foraging Spectrum: Diversity in Hunter-Gatherer Lifeways*. Smithsonian Institution Press: Washington D.C.
- ⁴² Russo, Michael 2004 *Measuring Shell Rings for Social Inequality*. In *Signs of Power: The Rise of Cultural Complexity*

- in the Southeast, edited by Jon L. Gibson and Philip J. Carr, pp.26-70. University of Alabama Press: Tuscaloosa.
- ⁴³ Cable, John S. 1997 The Ceremonial Mound Theory: New Evidence for the Possible Ceremonial Function of Shell Rings. From South Carolina Archaeology Week Poster, Shell Rings of the Late Archaic. South Carolina Institute of Archaeology and Anthropology, University of South Carolina, Columbia.
- ⁴⁴ Russo, Michael 2002 Architectural Features at Fig Island. In The Fig Island Ring Complex (38CH42): Coastal Adaptation and the Question of Ring Function in the Late Archaic, edited by Rebecca Saunders and Michael Russo, pp. 141-153. Grant 45-01-16441, South Carolina Department of Archives History, Columbia.
- ⁴⁵ Saunders, Rebecca 2002 The Fig Island Ring Complex (38CH42): Coastal Adaptation and the Question of Ring Function in the Late Archaic. South Carolina Department of Archives and History Report.
- ⁴⁶ Tuzin, Donald 2001 Social Complexity in the Making: A Case Study Among the Arapesh of New Guinea. Routledge, New York.
- ⁴⁷ Saunders, Joe W., Allen Thurman, and Roger T. Saucier 1994 Four Archaic? Mound Complexes in Northeastern Louisiana. *Southeastern Archaeology* 13(2):134-152.
- ⁴⁸ Russo, Michael 1991 Archaic Sedentism on the Florida Coast: A Case Study from Horr's Island. Ph.D. dissertation, Department of Anthropology, University of Florida, Gainesville.
- ⁴⁹ Gagliano, Sherwood M, and Clarence H. Webb 1970 Archaic-Poverty-Point Transition at the Pearl River Mouth. In The Poverty Point Culture, edited by Bettye J. Broyles and Clarence H. Webb, pp.47-72. Southeastern Archaeological Conference Bulletin No.12, Morgantown, West Virginia.
- ⁵⁰ Russo 1994 Why We Don't Believe in Archaic Ceremonial Mounds and Why We Should: The Case from Florida. *Southeastern Archaeology* 13:93-109.
- ⁵¹ Saunders, Joe W., Allen Thurman, and Roger T. Saucier 1994 Four Archaic? Mound Complexes in Northeastern Louisiana. *Southeastern Archaeology* 13(2):134-152.
- ⁵² Saunders, Rebecca 2004 The Stratigraphic Sequence at Rollins Shell Ring: Implications for Ring Function. *Florida Anthropologist* 57(4):249-268.
- ⁵³ Russo, Michael 2004 Measuring Shell Rings for Social Inequality. In *Signs of Power: The Rise of Cultural Complexity in the Southeast*, edited by Jon L. Gibson and Philip J. Carr, pp.26-70. University of Alabama Press: Tuscaloosa.
- ⁵⁴ Sassaman, Kenneth E, and Michael J. Heckenberger 2004 Crossing the Symbolic Rubicon in the Southeast. In *Signs of Power: The Rise of Complexity in the Southeast*, edited by Jon L. Gibson and Philip J. Carr, pp.214-233. University of Alabama Press, Tuscaloosa.
- ⁵⁵ Joe W. Saunders, Rolfe D. Mandel, C. Garth Sampson, Charles M. Allen, E. Thurman Allen, Daniel A. Bush, James K. Feathers, Kristen J. Gremillion, C. T. Hallmark, H. Edwin Jackson, Jay K. Johnson, Recca Jones, Roger T. Saucier, Gary L. Stringer, Malcolm F. Vidrine 2005 Watson Brake, a Middle Archaic Mound Complex in Northeast Louisiana, *American Antiquity* Volume 70, Issue 4, pp. 631-668.
- ⁵⁶ Joe W. Saunders, Rolfe D. Mandel, Roger T. Saucier, E. Thurman Allen, C. T. Hallmark, Jay K. Johnson, Edwin H. Jackson, Charles M. Allen, Gary L. Stringer, Douglas S. Frink, James K. Feathers, Stephen Williams, Kristen J. Gremillion, Malcolm F. Vidrine and Recca Jones 1997 A Mound Complex in Louisiana at 5400-5000 Years Before the Present, *Science New Series*, Vol. 277, No. 5333 (Sep. 19, 1997), pp. 1796-1799 (4 pages), American Association for the Advancement of Science
- ⁵⁷ Ancient Mound Site of Louisiana 2021 Louisiana Division of Archaeology
- ⁵⁸ 千葉県教育委員会 2023「特別史跡加曾利貝塚令和5年度発掘調査現地説明会」資料
- ⁵⁹ 千葉県教育委員会 2022「特別史跡加曾利貝塚令和4年度発掘調査現地説明会」資料
- ⁶⁰ (財)千葉県文化財センター 1978『千葉県荒屋敷貝塚 - 貝塚中央部発掘調査報告 -』
- ⁶¹ 黒坂禎二 2023「埼玉の縄文時代後晩期研究の現状 - 「環状盛土遺構」分析の新展開に向けて -」『埼玉の縄文時代後

晩期研究の現状』 埼玉考古学会

- ⁶² 吉田 稔 2014「長竹遺跡の環状盛土遺構について」『日本考古学』 第38号 一般社団法人日本考古学協会
- ⁶³ 阿部有花・天本昌希 2005 『井野長割遺跡（第9次）ほか』 財団法人印旛郡市文化財センター
- ⁶⁴ 吉野健一 2006 『君津市三直貝塚』 財団法人千葉県教育振興財団
- ⁶⁵ 江原英ほか 1997 『寺野東遺跡V』 財団法人栃木県文化振興事業団
- ⁶⁶ 阿部昭典 2011「東北北部における環状列石の受容と集落構造」『古代文化』 第63巻第1号 公益財団法人考古学協会
- ⁶⁷ 阿部昭典 2023「総論 環状列石の研究視点と課題」『月刊考古学ジャーナル』 No.789 ニューサイエンス社
- ⁶⁸ Paulette, TR 2000. The tragedy of the commoners. In Dobrea, MA & Robb, JE (eds) Agency in archaeology. New York: Routledge:113-129.
- ⁶⁹ Joyce, RA 2004. Unintended consequences? Monumentality as novel experience in Formative Mesoamerica. Journal of Archaeological Method and Theory 11(1):5-29.
- ⁷⁰ Osborne, JF 2014. Monuments and monumentality. In Osborne, JF (ed) Approaching monumentality in archaeology. Albany, New York: SUNY Press:1-19.
- ⁷¹ Randall, AR, Sassaman, KE, Gilmore, ZI, Blessing, ME & O'Donoghue, JM 2014. Archaic histories beyond the shell 'heap' on the St. Johns River. In Wallis, NJ & Randall, AR (eds) New histories of Pre-Columbian Florida. Gainesville: University Press of Florida:18-37.
- ⁷² Pluckhahn, TJ, Thompson, VD & Cherkinsky, A 2015. The temporality of shell-bearing landscapes at Crystal River, Florida. Journal of Anthropological Archaeology 37:19-36.
- ⁷³ Randall, AR 2011. Remapping Archaic social histories along the St. Johns River in Florida. In Sassaman, KE & Holly, DH (eds) Hunter-gatherer archaeology as historical process. Tucson: University of Arizona Press:120-142.
- ⁷⁴ Pauketat, TR & Alt, SM 2003. Mounds, memory, and contested Mississippian history. In Van Dyke, RM & Alcock, SE (eds) Archaeologies of memory. Oxford: Blackwell Publishers:151-179.
- ⁷⁵ Osborne, JF 2014. Monuments and monumentality. In Osborne, JF (ed) Approaching monumentality in archaeology. Albany, New York: SUNY Press:1-19.
- ⁷⁶ Kent G Lightfoot, Edward M Luby & Gabriel M Sanchez 2017 Monumentality in the hunter-gatherer-fisher landscapes of the Greater San Francisco Bay, California Hunter Gatherer Research 3.1
- ⁷⁷ Kenneth E. Sassaman, Meggan E. Blessing, Joshua M. Goodwin, Jessica A. Jenkins, Ginessa J. Mahar, Anthony Boucher, Terry E. Barbour, and Mark C. Donop 2019 Maritime Ritual Economies of Cosmic Synchronicity: Summer Solstice Events at a Civic-Ceremonial Center on the Northern Gulf Coast of Florida, American Antiquity, page 1 of 29
- ⁷⁸ The British Museum "The world of Stonehenge" Exhibition / 17 February - 17 July 2022 / Web Page
- ⁷⁹ Mark M. Jarzombek 2014 Architecture of First Societies: A Global Perspective, John Wiley & Sons
- ⁸⁰ Pluckhahn, TJ, Thompson, VD & Cherkinsky, A 2015. The temporality of shell-bearing landscapes at Crystal River, Florida. Journal of Anthropological Archaeology 37:19-36.